



日本植物病理学会ニュース 第65号

(2014年2月)

100周年記念事業についてお知らせ

2015年、日本植物病理学会は100周年を迎えます

Journal of General Plant Pathology 誌に, Review for the 100th Anniversary をシリーズで掲載中です。掲載後、約3ヶ月間はどなたでも無料でダウンロードできますので、是非この機会をご利用いただき、珠玉のレビューを研究などのご参考にさせていただき、会員外の方にも宣伝をお願いします。

100周年記念レビュー(和文翻訳版)を掲載した日本植物病理学会誌別冊を2014年秋に発刊することを予定しています。

2015年3月28日(土)に、東京(千代田区)において、100周年記念大会・シンポジウムを開催する予定です。また、同日、平成27年度大会と合同の懇親会を開催する予定です。

日本植物病理学会100周年記念誌(仮称)を編纂中です。

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会

平成25年度日本植物病理学会北海道部会は10月17日、18日に北海道立道民活動センター「かでる2.7」において開催され、96名の参加があった。第215回談話会では、「病害抵抗性育種の現状と展望」をテーマに講演が行われた。

(1) 尾崎洋人氏(道総研中央農試)による「イネいもち病抵抗性強品種「きたくりん」の育成」、(2) 田引 正氏(北海道農研)による「コムギ縮萎病抵抗性品種「ゆめちから」の育成」、(3) 坂本 悠氏(長崎農技セ馬鈴薯研)による「ジャガイモそうか病抵抗性品種「さんじゅう丸」の育成」、(4) 高橋宙之氏(北海道農研)による「テンサイの主要3病害に対する複合抵抗性品種「北海101号」の育成」が演題である。これらの内容は、いずれも食味、収量性、加工特性などの高い実用的特性を具えて、かつ高度な病害抵抗性を示す品種の育成経過と育成手法の紹介と要約できる。また、一般講演では20題の発表があり、活発な質疑が行われた。

(田中文夫)

(2) 東北部会

平成25年度(第49回)日本植物病理学会東北部会は、

10月28日と29日の2日間にわたって秋田市の「にぎわい交流館」において開かれた。参加者は一般会員52名、学生会員34名の計86名であった。講演題数は30題で、その内訳はウイルス・ウイロイド病が14題、糸状菌病が10題、細菌病が2題、植物保護が4題で、活発な討論が行われた。平成19年度から行っている日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は、本年度、地方独立行政法人青森県産業技術センターの山下一夫氏「地域特産作物に発生する植物ウイルスの分離・同定および植物ウイルス診断キットの開発と実用化」に授与された。本年度は「東北の環境保全型農業を支える新たな病害防除技術と将来展望」をテーマに公開シンポジウムが行われた。一般参加者は60名で、その内訳は農家、JA、農薬会社、県職員などからの参加であった。(1) 小林 隆氏(山形大学農学部)「My 田んぼ情報でイネの冷害、高温障害、病害発生を防ぐーGoogle マップによる水稲栽培管理情報システムー」(2) 藤 晋一氏(秋田県立大学生物資源科学部)「ばか苗病が増えている原因と農家ができる対策ーその発生生態からみえる増加要因ー」(3) 岩館 康哉氏(岩手県農業研究センター)「キュウリを萎れさせるホモプシス根腐病ーその発生実態と防除対策ー」が演題で、本蔵良三氏(宮城大学食産業学部)を座長とした総合討論「東北の農業の発展のためにー植物病理学がで

きること・農家が求めること」が行われ、活発な意見交換が行われた。幹事会ならびに総会において次期部会長として東北大学農学部の高橋英樹氏が選出され、平成26年度部会は岩手県で開催されることとなった。（藤 晋一）

(3) 関東部会

平成25年度日本植物病理学会関東部会は9月12日（木）、13日（金）の2日間にわたり、法政大学市ヶ谷キャンパス（東京都千代田区）のボアソナードタワー26階「スカイホール」で開催された。参加者は名誉・永年会員9名、一般会員99名、学生会員71名の計179名であった。講演題数は38題で、その内訳はウイルス病関係10題、細菌病関係6題、菌類病関係15題、病害抵抗性関係4題、病害防除関係3題で、活発な質疑応答が行われた。昨年度に引き続き特別講演を企画し、（独）農研機構果樹研究所の中野正明先生による「ウメ輪紋ウイルスの発生と研究の現状」の演題で講演をいただいた。現在根絶を目指し緊急防除が行われている重要病原について、基礎的知見から現場での対応まで幅広くご紹介いただき大変好評であった。開催初日の昼の休息時間に役員会が開催され、関東部会の会計報告および事業計画等について話し合いが行われた。初日夕刻には同じくボアソナードタワー26階のA会議室で懇親会（参加者：57名）が開催され、研究の情報交換等を通して大いに親睦が深められた。（西尾 健）

(4) 関西部会

平成25年度関西部会は9月26日、27日の2日間にわたり、岡山市の「岡山大学創立50周年記念館」で過去最多244名の参加者を迎えて開催された。部会役員会は26日午前に岡山大学農学部で津下誠治事務幹事の進行で行われ、庶務・会計報告等が審議された。次期の関西部会長には川北一人先生が選出された。26年度の関西部会は、佐藤幸生開催地委員長、守川俊幸開催地幹事のもと富山県で開催される。これらは同日午後に開催された部会総会で承認された。部会終了後には、久保が「植物病原糸状菌の感染戦略の解明をめざして—ウリ類炭疽病菌の感染器官分化と病原性研究—」と題した部会長講演を行った。発表は口頭56題、ポスター55題の計111題と過去最多であった。内訳は感染生理63題、発生生態17題、分類・同定・診断11題、病害防除20題で、ポスターセッションを含めいずれの会場においても活発な討議が行われた。26日の発表終了後には大学近くのリーセントカルチャーホテルを会場に141名の参加者を得て懇親会が盛大に開催され、和やかな歓談と研究の活発な情報交換が行われ、参加者の親睦が

深められた。プログラムの構成、部会の進行・運営、発表会場・懇親会会場の設定など全てにわたって細やかな配慮の行き届いたすばらしい部会の開催を頂いた白石友紀開催地委員長、一瀬勇規開催地幹事をはじめ岡山大学および岡山県の関係諸氏に心より感謝申し上げる。（久保康之）

(5) 九州部会

平成25年度日本植物病理学会九州部会は例年通り九州病害虫研究会との共催で、11月13日（水）～14日（木）の2日間にわたり、熊本市の「KKRホテル熊本」で開催された。参加者は初日の一般講演会が約100名、2日目の第37回シンポジウムが約80名であった。講演会ではウイルス病関連5題、菌類病関連4題、細菌病関連5題、防除関連7題、合計21題の発表に関して活発な質疑応答が行われた。さらに、岡山農研の川口章氏による特別講演「良質な科学的根拠創出のための現地研究（On-farm research）について」では、川口氏の質・量ともに素晴らしい情熱的なプレゼンテーションに参加者が大きな感銘と刺激を受けた。また、新たな試みとして「罹病植物からの病原菌分離のコツ—糸状菌および細菌—」と題したビデオワークショップを日本農薬（株）の松崎正文氏にお願ひし、特に経験が浅い若い部会員の勉強になるとともに部会員同士の技術の共有・継承という面からも好評であった。初日の講演終了後には同ホテル内会場で地元熊本農研センターの森山美穂氏の司会によって「講師を囲む会」（参加者40名）がもたれ、和やかな歓談と情報交換が行われ、参加者の親睦を大いに深めることができた。14日のシンポジウムでは、まず「佐賀県のタマネギおよびトルコギキョウにおけるアイリス黄斑ウイルス（IYSV）の発生と防除について」と題して善正二郎氏（佐賀県園芸課）から伝染環の解明とそれに基づく効率的な防除法についての詳細な解説があり、虫媒伝染病害研究のテクニックと奥深さについて理解を深めることができた。さらに、「病害診断の現場から」と題して、櫛間義幸氏（宮崎総農試）と成富毅誌氏（佐賀農技防）から貴重な事例を報告していただくとともに、病害診断に関する心構えや今後の課題についての具体的な話があり、活発な意見交換の場となった。幹事会は13日昼の休憩時間に開催され、部会役員の交代・選出、庶務・会計報告、次年度の開催計画等が審議され、14日の総会で承認された。すばらしい部会開催を実現していただいた関係各位に厚くお礼申し上げます。平成26年度は鹿児島県担当で開催される予定である。（田代暢哉）

【関連国際会議開催状況】

2013年度アメリカ植物病理学会大会報告

本年度のアメリカ植物病理学会（APS）大会はアメリカ菌学会（MSA）との合同で、8月10～14日の5日間に亘ってテキサス州オースティンのコンベンションセンターで開催された。10日はフィールドトリップやワークショップ、APSの各種委員会、11日は総会、表彰式が行われ、20のスペシャルセッション、30のテクニカルセッションが会期末日まで行われた。ポスター発表は11日に掲示し、12日と13日に各自1時間のコアタイムが与えられ、活発な質疑応答が行われた。

今年はMSAとの合同開催であったことから昨年よりもポスター発表が多く、実に700余題の登録があり、実際に掲示された数はそれよりやや少ないが、概ね掲示されていたようであった。参加者はもちろんアメリカ在住の研究者が多いが、今年はテキサス州で開催されたこともあり、メキシコや南米からの発表者が多く、その他はヨーロッパ、中国からの参加者も目立った。日本からの事前登録参加者（全てポスター発表者）は2名であったが、その1題は発表取り下げになっていたようで、実際に参加したのは私だけだった。前回同様に本大会全体の発表演題は、新病害、化学防除、殺菌剤耐性菌、生物防除、IPM（発生予察を含む）、生態・疫学・リスク評価、分類・進化、宿主抵抗性・感染生理といったカテゴリーの演題数が非常にバランスよく配置され、発表が突出して多いまたは少ないカテゴリーはなかった。参加者は様々な分野の発表をじっくり閲覧することができた。ただし、MSAと合同開催ではあったものの、発表の多くは植物病理の内容で、純粋な菌学の発表は少なかった。また、テキサス州というアメリカ南部での開催であったことから、発表内容にはダイズ、トウモロコシ、カンキツに関する発表が多かった。

私自身はポスター発表を行ったが、なんと日本からの発表者が私だけだったので、質問者からは、日本の植物病理学研究の現状について聞かれるなど、少々返答に困る場面もあった。しかしながら、私の研究内容に興味を持ってくれた研究者が質問に来てくれて、また私とは異なる視点からの質問もあり、大いに刺激になった。この分野における世界的権威と言える研究者とも質疑応答を通じて交流を持つことができたことは、今後の自分の貴重な財産になったと思う。

今回の大会でも講演要旨は事前にPDFで発信されており、自分で印刷して持参するか、スマートフォンやタブレットPC用アプリが無料で提供され、プログラムや要旨が全てこれらのデバイス上で閲覧でき、聴きたい発表を自分でスケ

ジュール管理できるようになっていた。昨年よりもタブレット端末を使う参加者が多くなっていたのが印象的だった。

前年に続き、APSでの参加は今回で2回目となるが、やはり期待を裏切らない充実した内容であった。アメリカでは基礎だけでなく応用研究が非常に重視され、実用化を見据えた農業技術開発研究、または農家の圃場での調査や介入試験などの現地研究の内容が多く、それら研究のアウトプットは農業生産現場への還元であると同時に、論文発表も視野に入れ、試験設計やデータ解析は入念に行っているのが印象的だった。来年は8月9日～13日にミネソタ州ミネアポリスでカナダ植物病理学会と合同で開催され、日本からの積極的な参加が期待される。（川口 章）

【会員の叙勲のお知らせ】

本学会名誉会員である甲元啓介氏および、小川 奎氏が、それぞれ、教育研究および農林水産行政などの公務に長年従事し成績を上げた功勞により、平成25年秋の叙勲において、瑞宝中綬章を授与されました。

【会員の関連学会等における受章のお知らせ】

柿澤茂行氏（産業技術総合研究所）が今年度の第12回日本農学進歩賞を受賞されました。日本農学進歩賞は、農林水産業およびその関連産業の発展に資する農学の進歩に顕著な貢献をした者を顕彰する賞です。受賞の対象となった研究業績は、「ファイトプラズマの膜表面タンパク質と宿主決定機構に関する研究」です。

【書評】

松本直幸 著 「雪腐病」

21.6 × 15.6 × 1.8 cm, 162 頁

2013年10月28日、北海道大学出版会

ISBN: 978-4-8329-8213-0 定価：4,500 円 + 税



病気の発生には、主因（病原体）、素因（宿主の感受性）、誘因（環境条件）が必要とされるが、本書が対象とする「雪腐病」は、まさにこの3つの要素を解きほぐしてから統合的に理解することの重要性を教えてくれる病害であることが分かる。

雪腐病は数種の植物病原糸状菌によって積雪下で引き起こされる。低温・暗黒・多湿という特殊な環境に適応したそれぞれの病原菌が、他の微生物と競合しながら宿主植物の抵

抗性が低下したときを狙って生き延びていく戦略が国内外の豊富な文献を元に体系的に詳しく紹介されている。そして病原菌それぞれの生態と宿主作物の栽培集約度に応じた防除手段が例示されている。雪腐病研究の資料としての価値はもちろんのこと、悠久の時を経て病原菌がサハリンから移動してきたことを推定したり、病原菌に“個体”の概念を取り入れることで時空間的な生存戦略が明らかにされたり、著者の視野と考えるの広さにも触れられる。

病気の防除対策を講じるためには、病気を観察して理解することが大切である。本書は観察するための視点と観察結果を体系的に理解するための考え方を提示してくれる。著者のライフワークである雪腐病を通じて病害研究のヒントと楽しさを感じさせてくれる本書を、雪腐病に関心のある方はもちろんのこと、多くの植物病理学関係者の皆様にお勧めする。
(兼松聡子)

【学会ニュース編集委員コーナー】

学会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたく願います。

投稿宛先：〒114-0185 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、根岸寛光、有江 力、宇賀博之、芦澤武人

編集後記

新年おめでとうございます。新年にあたり会員皆様方のご健勝と学会のさらなる発展を祈念いたします。

学会ニュース第 65 号をお届けします。本号は、本会 100 周年記念事業に関するお知らせと本年度に行われた部会の開催状況を中心に掲載しました。

100 周年がいよいよ来年に迫ってきました。記念事業は、学会誌への記念レビューの掲載など一部はすでにスタートしておりますが、記念誌編纂や記念大会準備なども滞りなく着々と進んでいるようです。今後とも本事業に関心を寄せていただき一層のご協力をよろしくお願いいたします。

部会は、北海道、東北、関東、関西、九州各地域とも順調に開催されて興味深い発表や活発な質疑が行われています。一般講演のほかに、特別講演やシンポジウムが企画されるとともに、東北部会では数年前から地域貢献賞の授与が行われ、また九州部会ではビデオで解説するワークショップが新たに試みられるなど、各部会とも開催方法や運営に様々な工夫をこらして部会を充実させるご苦勞がうかがえます。部会の開催にご尽力された関係皆様に厚くお礼申し上げます。

アメリカ植物病理学会の参加報告を掲載しました。アメリカ菌学会との合同開催でポスター発表も多く盛会でしたが日本からの参加者は川口 章氏一人だったとのことで、次回には日本から多くの会員皆様の参加が期待されます。

大変喜ばしいお知らせです。昨年秋に、難波成任氏が紫綬褒章を受章されました。また、甲元啓介氏と小川 奎氏が瑞宝中綬章を受章されました。誠にありがとうございます。さらに本学会員の柿澤茂行氏が日本農学進歩賞を受賞されました。心からお祝い申し上げます。

本年も学会ニュースを学会内の有益な情報交換の身近な場としてご活用していただきたいと思います。引き続きのご愛読、またご投稿、ご意見をよろしくお願いいたします。

(高橋賢司)



日本植物病理学会は2015年、100周年を迎えます

日本植物病理學會報

第一卷 第一號

日本に於ける植物病理學の歴史

理學博士 白井光太郎

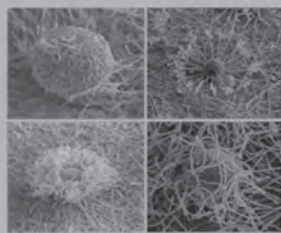
ON THE DEVELOPMENT OF PLANTPATHOLOGY IN JAPAN :
A BRIEF HISTORICAL SKETCH.

By

MITSUTARÔ SHIRAI

Journal of
**General
Plant Pathology**

The Phytopathological Society of Japan



Springer

JGPP 79(4) から、Reviews for the 100th Anniversaryの掲載を開始しました
2015年3月28日(土)100周年記念大会・シンポジウムを開催予定です(東京)
日本植物病理学会誌100周年記念誌(仮称)を発行します

